

口永良部島でのフィールドワーク後の東京にお
ける成果について

慶應義塾大学
長谷部葉子研究室

■はじめに

1枚目では実際のFWにて行った活動を述べさせていただいたがこの2枚目では口永良部島が噴火した後、どのような活動を東京、口永良部島で行ったかについて言及をさせていただきたい。前述の通り、私たちはフィールドワーク期間中学生全員で口永良部島に入ることが出来なかった。故に、噴火後研究会の総意として個別に口永良部島を訪問し、常に学生が口永良部島に滞在しているという状況を作ること、東京で口永良部島の発信をすることでフィールドワーク中に行うことが出来なかった活動を行ってきた。具体的な活動は以下の通りである。

■噴火後の口永良部島訪問

火山噴火後の8月22日～24日、プロジェクト担当教員池田靖史教授と長谷部葉子准教授、プロジェクト担当学生2名の4名で口永良部島を訪問、噴火後の慶應ハウスの普及作業と島の祭りに参加し、島民の皆さんへのヒアリング調査と来年度へ向けてのプロジェクトの展開・見通しの意見交換及び議論を行い、プロジェクトのスタディーツアービジネスの継続とその普及に向けての検討を行った。

■ORFでの屋久島町庁、島民の方の登壇及び来場者に向けた説明

ORF (Open Research Forum) とは、2014年11月17日～22日までに行われた慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに関する研究会、諸団体の研究発表の場である。そこでは、

- 1) ポスターや映像などを通じて来場者に向けて説明を行うポスターセッション
- 2) ニコニコ動画の全国ネットを持つニコファーレでトークセッションに登壇し講演のような形でパネルディスカッション

以上の2つの方法で口永良部島プロジェクトについて紹介した。1)のポスターなどで説明を行うブースでは数多くの来場者の方に説明をさせていただき、口永良部島の噴火の事実や今までの活動、これからの活動について説明をした。

また2)の来場者向けの説明では来場者(約5000人)を対象に口永良部島とは何かということから噴火に関すること、スタディーツアーのことについて説明させていただいた。その結果多くの方に口永良部島について認知していただいたと実感をしている。この来場者向けの説明は今年度だけでなく、来年度以降も継続して行っていく予定である。そのため、2)のパネルディスカッションの中で屋久島町庁と口永良部島の島民の方に登壇をしていただいた。そのほかにも担当教諭である長谷部准教授、建築の池田教授、長谷部研究会生徒、池田研究会生徒などが登壇をし「リスクマネジメントとサステイナビリティ」というテーマ

でディスカッションをした。この様子は「ニコニコ動画」という動画サイトにて放映をされた。

■夜光貝の販売

フィールドワーク参加高校である郁文館グローバル夢学園高等学校の文化祭「郁秋祭」にて口永良部島の夜光貝の販売を行った。2014年10月4日、5日に行われた「郁秋祭」では、口永良部島産の夜光貝を見て触ることのできるブース、夜光貝を磨く体験ブース、高校生が夜光貝を磨いてアクセサリーを作る映像の閲覧ブースを設け、屋久島での活動や口永良部島の夜光貝の魅力が伝わるような作りとした。夜光貝は大きさによって価格をバラバラにし、様々な価格帯を用意した。噴火等の想定外の事態が発生したため多くの夜光貝を準備することは出来なかったが、13個の夜光貝を準備した。そして、4つは郁秋祭前に販売し残りの9個の夜光貝を売ることが出来た。その純利益は35000円であった。(内訳：合計売上金額36400円、仕入れ値0円、装飾等の準備金1400円※今回は屋久島で作った夜光貝と昨年度の余りを販売したため仕入れ値は0円であった。)

参考として昨年度の夜光貝の純利益も記載する。純利益4910円(内訳：合計売上金額112000円、仕入れ値70000円、貸出分元値28900円、装飾等の準備金8190円)

今後も継続して口永良部島で生産されている夜光貝の魅力を発信していきたいと考えている。

■防災マップの作成

口永良部島の噴火を受け、防災マップの作成を行っている。口永良部島では去年8月4日に噴火が起きた。その噴火当時、口永良部島にプロジェクトメンバーは滞在していた。しかしながら、その噴火時に避難経路など「もし噴火が起きたら」という意識を持つことが出来ていなかったため、島の方にご協力を頂いて避難をするという形になった。そこで、活火山を抱える口永良部島で活動を行う者にとって持つべき防災意識を確認、定着させるために口永良部島の防災マップを作成する。その防災マップにより当プロジェクトメンバーに関わらず口永良部島で活動をする際には噴火に対して準備をするという意識付けを行い、もし再度噴火が起こったとしても被害を最小に抑えるというリスクマネジメントを行いたいと考えている。今回のフィールドワークも我々大学生だけでなく高校生も帯同していた。次年度以降もこのフィールドワークを行うためしっかりとした防災意識を持っておくことが必要だと考えている。また、口永良部島ではまだ噴火のレベルが3から下がっておらず安全面から観光客の方に来ていただけないという現状がある。そこで「防災」という視点から口永良部島を見直して口永良部島に観光客の方に来ていただくためには何が必要なのか、またどんなアプローチをすれば安心してきてもらえるのかについて改めて考えなおすきっかけにしたいと考えている。また、今年の2月にプロジェクトメンバーを中心に大学生が10数

名口永良部島を訪れるがその中で防災マップに基づいた避難訓練を行いたいと考えている。

■大学生地域派遣隊構想

2014年10月から約2か月間慶應義塾大学の担当学生が口永良部島に中期滞在を行っていた。その中で大学生が地域に入る必要性を感じたため、大学生地域派遣隊の提言を屋久島町庁、鹿児島県庁の方にプレゼンさせていただく機会を得た。今後は口永良部島をモデルケースとして多くの自治体に波及させるために活動を行っていく予定である。そこで、その概要を以下に記述する。

前提として現在国立社会保障・人口問題研究所（社人研）データを基にすると1799の市町村のうち、896の市町村が現状から女性の人数が半減するという状況にある。国を挙げた地域創生が不可欠である。そこで、大学生を地域活性の中心に置いた地域派遣隊を行う。具体的な概要としては大学生が休学をしない形で地域に中期的に（半年から1年間）滞在できるようなモデルを作るものである。大学生は休学しない形で地域に入り、様々な役割を担う。具体的に大学生が担う役割は4つある。1つ目は教育者である。地方の中には学習塾が無い場所も存在する。そこで、地域派遣隊として派遣された大学生が島民に対する塾の先生のような教育者となることが期待される。2つ目が起業家である。地域には職が不足しているという問題も指摘されている。そこで、大学生が地域に入り、中期的に滞在をする中で見えてくる課題をビジネスで解決する起業家となることも期待される。3つ目が研究者である。これは大学生の本職といえるかもしれない。地域の中でゆっくりと流れる時間の中でその地域についてじっくりと研究をし、その成果を報告するという役割を期待される。4つ目が文化人である。地域活性化を研究する学生は地域にとって外部者である。そのため、自らが持っている地域の方とは異なる文化、価値観のもとに行動することで今まで存在しなかった文化を根付かせることが期待される。大学生派遣隊は、地域で期待される役割が固定されており、時間的制限もあるため何かを起こそうという気概を認識させることが出来、地域に新しい風を吹かせることが出来るのではないかと考えている。

また、付随的に以下の2つの学び、機会を得ることが出来た。

■慶應義塾担当教員と慶應義塾評議員・理事による口永良部島における未来計画の検討

2015年2月26日～3月1日にわたり、慶應義塾評議員でありかつ理事である、麻生泰氏とプロジェクト担当教員の一人である長谷部葉子とリーダー格の学生4名で口永良部島へわたった。そこで、通年にわたり定期的に学生を島へ派遣し、島民の方との協働プロジェクトを実施し、大学での一年を通してのフィールドワーク新設科目申請を検討中である。その授業計画の内容検討を島民の方と行うための訪問を行う。また慶應義塾の評議員・理事の麻生氏がこの取り組みをさらに深化させ、持続可能な制度化へとすすめるための島見学、プロジェクト関係者との意見交換も兼ねている。今回は、屋久島町長の荒木氏、屋久島町役場の

関係者の皆様との懇談も予定されており、より建設的な訪問になり、本プロジェクトの助成を受けてのまとめとしては、自然災害に見舞われ予定変更を余儀なくされたが、結果的に口永良部島での活動を有効に実施することができたと言える。またこのプロジェクトの通年での授業化に先駆けて、2月～3月で慶應義塾のプロジェクト関係の学生及び学内からのプロジェクト外の学生が島の皆さんとの農作業、海岸清掃などの島の生活環境整備につながる、協働作業を試行的に、かつ長期的に取り組む。大学、行政、地域の3者が一体となって、実感を伴った持続可能なプロジェクトへとまたさらに一段階ステージを新たに展開することができたと言える。

■ 建築を通じたコミュニケーション

今回私たちは口永良部島にて、島の環境や島民の方々に極力迷惑を掛けないということ为前提に踏まえ、3Dプリンターといったデジタルファブリケーションと島にある自然素材を融合したシャワーブースの仮設を提案した。残念ながら度重なる災害により実際の建物の設立までには至らなかったが、私たちの最終目標である「口永良部島にて、3Dプリンターを用いた家を建設すること」の実現に向けて大きく前進したと感じている。さて、このプロジェクトの元々の意義は「3Dプリンターと自然素材を融合させてデジタルファブリケーションの新たな分枝を見出すこと」と、「シャワーブース等の利便性のある『空間』を作ること、離れた場所から来るプロジェクトメンバーや高校生たちに少しでも過ごしやすい生活を提供すること」であったが、実際にプロジェクトを進めていくうちに、「建築を媒体とした高校生たちや島民とのコミュニケーション」が如何に重要でこのプロジェクトの根底を支えているかを考えさせられた。今まで口永良部島プロジェクトにおいて、建築チームはほとんどコミュニケーションというものに疎い立場であった。何故なら島での作業量が他のプロジェクトに比べて多いためであり、滞在中のほとんどの時間は建設に縛られてしまう。なので、今まで建築チームでは島民などの他の人々とのコミュニケーションに重点を置くことができなかつたため、「建築を媒体としたコミュニケーション」という『支え』に行き着くことができなかつたのだと思う。しかし今回は、不幸中の幸いというべきか、災害により島での時間はたっぷりであったので、今までできなかった多くの島民とのコミュニケーションを図ることができた。この偶然の経験で行き着いたのが「建築を媒体としたコミュニケーション」というプロジェクトの根底にあったテーマの明確化である。「建築」というコミュニケーション手段は私たちにしかないものであり、それが他のコミュニケーション手段とどのような違いを持ち、どのような効果を発揮するのかは今後も口永良部島プロジェクト内において、最終目標と並行して大きなテーマになっていくであろう。

■ シンポジウム報告

参加者学生2名

参加人数総計 11名

口永良部島にて、屋久島庁にて、鹿児島県庁にてシンポジウムを3回行った。これからも継続して更に多くの島民の方にフィールドワークの成果、島内への還元についてアピールをしていきたいと考えている。今回の3回のシンポジウムでは島民向け、屋久島町向け、鹿児島県庁向けに地域派遣隊についてのプレゼンテーションを行い、それに伴い疑問点などをディスカッションした。その結果、お互いのさらなる相互補てんは必要であるが、この活動の必要性は認識されているため、建設的に行動を進めていきたいという結論に至った。しかしながら、今回のシンポジウムでは多くの島民の方にアプローチすることは出来なかった。そこで今年度中に以前のシンポジウムよりも大きな形のシンポジウムを開催したいと考えている。今年度のフィールドワークを含めた活動の成果、これから行う活動の説明を行いたいと考えている。そのうえで、大学生が担える役割、島の将来ビジョンについて島民の方と共に議論をしていきたいと考えている。

■考察

以上の活動を行ってきたが、これらの活動はフィールドワークにて噴火という事態に直面し、口永良部島にフィールドワークに行けるということが「当たり前でない」ということを学んだがゆえに行うことが出来た活動である。2枚目の活動はほとんど学期期間中に行った活動であったため、主体として活動した学生は数名ではあるが、その際にも研究会内で合意形成を行い、島民の方の理解も得て進めてきた。これらの一連の活動は地方創生の流れの基盤づくりをすることが出来たと考えている。また、今回のアイランドキャンパスを採択していただいたため、来年度に向けた新たな取り組みを推進することが出来た。その取り組みを屋久島町役場の方にも一定の評価を頂くことが出来た。これは、アイランドキャンパスを採択いただけたおかげである。本当に感謝したいと思う。

